

● 読書感想文コンクール 中学校の部 ●



優秀賞

和田 茉南花 (わだ まなか) みなみ野小中(みなみ野中) 2年生

作品名:『シーラという子—虐待されたある少女の物語—』を読んで

図 書:シーラという子

『虐待されたある少女の物語』。この本のサブタイトルに私は大きな関心をもつた。ノンフィクションで感動する実話を読んでみたい、という軽い気持ちで読んだ本であったが、この本を通して私の心は大きく揺さぶられた。

この本は、著者のトライとその教え子であるシーラの約一年間におよぶ葛藤が描かれている。トライは教育として「くず学級」と呼ばれる精神に障害をもった子どもたちのクラスを教えていた。そのクラスに、新たにシーラという少女が加わる。しかし、その少女はまだ六歳という年齢なのにもかかわらず、三歳の男の子を連れ出し木に縛りつけて火をつけ、大やけどもさせた、という事件をおこしていた。クラス内でもかなり問題のある生徒だったが、トライの懸命な努力によってだんだんクラスになじんでいく。また、シーラはトライに心を打ち明けるようになり、トライは彼女の心の純粋さや苦しい過去などを知っていく。

私がこの本を読んで印象に残ったことは、個々の場面というよりかは、シーラが物語全体を通して成長していく姿だ。最初の場面で、シーラが金魚を一匹ずつつかまえて鉛筆で目をくり抜いている、という所があった。私は想像しただけで気分が悪くなつた。このときのシーラは、生き物の命を簡単に傷つけてしまうくらい、自分自身の心も壊れていたのだろう。また、トライから渡されたプリントを何枚もすぐにやぶって丸めて投げ捨ててしまう、という所もあった。まだ六歳だから、という理由も多少はあるだろうが、親からの虐待によって、言葉では表せない本当に苦しい気持ちがあったのだと思う。他人を信用できず、物に当たることしかできなかつた彼女の気持ちが痛いくらい伝わってくる。そんなシーラだったが、徐々に性格や態度が変わっていくのが文章にも表れていた。例えば、問題を解いてミスしてしまったときにひどく落ちこんでしまうシーラだったが、トライに抱かれることですぐに笑顔になるようになった。親や他人に、優しく接されたことのないシーラにとって、トライの愛情はとても大きなものだったのだろう。最初のころの無表情で何の感情も示さないシーラとは大違つた。また、シーラは涙を流すようになつた。普通学級に行くことになり、トライや仲間と別れなくてはならない、と知つたとき、大粒の涙を流していた。シーラはトライと出会つたことで、ルールやマナーとともに、喜びや悲しみなどの様々な感情も得たのだ

思う。

世界では様々な社会問題があり、児童虐待もその中の一つだ。それに、私が驚いたのは、家庭環境がととのっていない途上国のみならず、私たちの住む日本などの先進国までもが、児童虐待が大きな問題とされていることだ。私は、日本は平和で豊かな国だと思っていたため、とても驚いた。

本に出てきたシーラは父子家庭で貧困に苦しんでいたように、児童虐待がある家庭には何かしらの事情があるのだろう。しかし、その事情を何も知らされていない子どもに突然暴力などの虐待をするのはおかしいと思う。たとえお金がなくて子どもに教育を受けさせられなかつたとしても、保護者や周囲の人に温かい目で見守られて毎日生活できていれば十分幸せなはずだ。シーラのように、とても感情豊かで実は明るく優しい性格をもっている、という子どももいるだろう。そんな純粋で子どもらしい人柄を、虐待によってつぶしてしまっているのだ。だからその子どもは大きな精神障害に陥り、心のコントロールができなくなつて様々な問題をおこしてしまうのだ。虐待というものがこんなに恐ろしいということを知つた。

私は『シーラという子』を読んで、児童虐待について深く考えたことで、普段の私自身の生活が大きく変わったと思う。「虐待」とは少し違うかもしれないが、学校などで友達同士で言い合っている言葉の中にも、恐ろしいものがいくつもあると思う。特にそう思うのは「死ね」という言葉だ。私は実際に言ったことはないが、周りから聞くことはよくある。これも虐待と同じで、何かしら理由があつて言った言葉であつても、実際に相手が死んでしまつたら一生取り返しがつかない。軽い気持ちで発した言葉でも、相手の胸には想像をこえるくらい深く刺さることもある。だから、少レイライラしただけで「死ね」と言うのは信じられないことで、もう少し別の言葉で伝えるべきだと思う。

このように、直接虐待とは関わりがなくても、一人一人が意識を変えていくことで、虐待や差別のない世の中へ近づく、と私は信じている。